

1	研究・研修事業	2012年度ホスピス緩和ケアナース養成研究事業	
2	期 間	2012年 4月 1日 ～ 2013年 3月31日	
3	報 告 書	I 事業の目的・方法 II 内容・実施経過 III 成果 (上記Ⅰ～ⅢをA4縦判・横書 6,000字程度にまとめる) IV 収支報告 ①助成金の主な使途(人件費以外は領収書等の証憑書類を添付) ②当該助成金に関わる部分の決算書「写」 (貴機関の全会計決算書でなく、当該助成計上部分のみで可) *決算期の関係で2013年3月18日(月)までに「写」を提出できないときは提出予定日を記入 (提出予定日: 2013年 月 日) V 添付書類 当該施設の研修カリキュラム(パンフレットでも可)	

2012年度 ホスピス緩和ケアナース養成研究助成報告書

聖ヨハネホスピスケア研究所所長

山崎 章郎

聖ヨハネホスピスケア研究所研修担当

近藤 百合子

I 事業の目的・方法

本事業の目的は近年急増しているホスピス・緩和ケア病棟および緩和ケアチーム、在宅でのホスピス・緩和ケアを提供することのできる看護師の養成、ケアの質の向上を図ることである。

方法は日本看護協会ホスピス緩和ケアナース養成研修を受講した研修者に、笹川医学医療研究財団によって指定されたホスピス・緩和ケア病棟にて3週間の臨床研修を実施し、講義での学びを統合しホスピス・緩和ケアに対する知識・技術を深めるプログラムである。

聖ヨハネホスピスケア研究所は聖ヨハネ会 桜町病院 聖ヨハネホスピスと連携しながら、当研究所看護師を専任の研修担当者として配置し、臨床研修が実りあるものとなるようにしている。

II 内容・実施経過

1) 第1週

- ①ホスピスケアにおけるチームアプローチの重要性を理解するためにホスピスボランティアを3日間体験する。
- ②1週目に1日かけて、当研究所独自に聖ヨハネホスピスで行なわれている「家族・遺族ケア」「ホスピスコーディネーターの役割」「ボランティアの役割とトレーニング」「スピリチュアルペイン」「セデーションのガイドライン」「看護師の役割」「音楽療法について」などのテーマでそれぞれの担当スタッフが講義を行っている。

2) 第2、3週

看護師について看護師実習

- ① 看護師に同行し患者・家族へのケアのあり方を1対1で学ぶ
- ② 回診に同行し医師と患者・家族とのコミュニケーションの実際と、回診における看護師の役割を学ぶ
- ③ ホスピス外来の実際を学ぶ
- ④ 訪問診療の実際を学ぶ（研修期間中に対象者がいる場合）
- ⑤ ホスピスケアにおける質の維持、向上のため継続的に毎日行われている各種カンファレンスに参加し、ホスピスケアにおけるチームのあり方やカンファレンスの意義を学ぶ
- ⑥ アロマセラピーや音楽療法などの補助的療法の実際を学ぶ
- ⑦ 週一回行われている入退棟検討会に参加し、どのようなプロセスで入院が決定されていくかを学ぶ

- ⑧ 以上のほかに病棟勉強会、毎月の行事、看護学生・一般市民を対象に行っている〈2時間セミナー〉、遺族ケアとして行っている〈虹の会〉など桜町病院 聖ヨハネホスピスで行っている事柄で、研修者が希望される場合には参加し実際に学ぶ場を提供している。

Ⅲ 成果

1. 実習参加者9名に対するアンケートの結果

1) 実習期間について 適当：9名

- ・環境に慣れ、落ち着いて生活できるくらいで丁度良かったと思う。
- ・もっと学びたいことがあったが、これ以上長いと体力的にも仕事場への影響や負担も大きい。
- ・自施設との比較や課題を明確にするのに丁度良かった。また、5日実習、2日休みというスケジュールに対し、振り返りと次週への目標が考えやすかった。
- ・看護実践（受持ち）をするのであればもう少し長い方が学びになるのだろうが、見学実習だったので丁度良かったと思う。

2) 実習の時期 希望通り：8名 どちらともいえない：1名

- ・希望で10月にしたが、座学直後の7月であればより深く理解できたかもしれないと思った。
- ・講義を受けてから約2ヶ月開いたが、モチベーションが下がることなく実習に臨めたことや、講義の振り返りにもなったので妥当な時期だった。
- ・最初の希望が10月であり、希望通りではなかったが、座学の後、現場で振り返る時間が出来た。

3) 実習プログラムについて 大変良い：9名

- ・様々なイベントやアロマセラピー、音楽療法、ボランティア体験も含んでいたのが良かった。
- ・施設の特徴を感じられる研修内容だった。
- ・多職種と関わらせて頂いたことで、チーム力の強みが理解できた。
- ・関心のあった補助的療法やカンファレンスへの参加ができて良かった。ボランティア活動はもう少し長くても良かった。

4) 実習の受け入れ体制について 大変良い：8名 良い：1名

- ・スタッフの皆さんが、気持ちよく指導して下さった。
- ・忙しい中でも丁寧に対応して頂き、安心して実習に臨め、研修生として貴重な時間を過ごすことができた。
- ・多忙な中、スタッフの方々に迷惑をかけてしまったという思いがあった。

5) 実習の指導体制について 大変良い：9名

- ・適宜、困っていることはないかなど、声を掛けて下さり、安心して実習することができた。
- ・毎日の振り返りの時間があり、まとめるにも助かった。
- ・日々、振り返る時間を設けてもらえ、その日の学びや悩みを共有でき、気持ちの整理もできた。

- ・学習会に参加させて頂けたこと、医師からも指導が受けられ学びに溢れていた。
- ・指導やアドバイスが素晴らしく、経験も多く、様々な質問に的確に答えて頂き、沢山の学びがあった。

2. 提出されたレポートから研修修了者の感想などを抜粋

《緩和ケア科で勤務している研修生》 1名

- ・ボランティア研修を通し、ボランティアの方々から活動に対する志や患者さんやご家族と関わる姿勢について沢山の学びを得た。中でも印象的だったのは、「ボランティアを通して社会勉強をさせて頂いている」「ボランティアは“Doing”ではなく“Being”という精神をもって活動しているということ。
- ・患者さんはホスピスで生活を送る一人の人として入院しており、ここで生活をする上で患者さんやご家族が必要とすることのお手伝いをさせて頂くことが、ホスピス緩和ケア病棟の看護師の役割であることを学んだ。
- ・今回の実習で学んだこと、感じた気持ちを時々一歩立ち止まって思い返すことで、患者さんやご家族が最期まで持ち続ける「希望」を支えていきたい。その「希望」を支える思い・姿勢を持ち続けることが、自分にとってのホスピスマインドであると考えている。

《一般病棟で勤務している研修生》 8名

- ・ボランティア活動を通し、私自身が一般的な考え方を忘れないようにし、初心を振り返ることの大切さや、人との触れ合いが人生を豊かにするということを学んだ。また、療養の場において患者さんやご家族に安らぎを与え、様々な活動を通し、ボランティアの存在の大きさを実感することができた。更には、患者さんの生き方、価値観を尊重するためには控えめな心遣いが必要ということも学んだ。
- ・亡くなった患者さんの安らかな表情が印象的であり、これまでの人生の過程、ご家族との関わりに加え、スタッフの全人的なケアもこのような表情に表れているのだろうかと思った。自分中心のペースで患者さんに接していた自分を振り返る機会につながった。
- ・入院すると一人の患者さんとして見られがちだが、意思を伝えられない患者さんであっても本来は人格ある一人の生きている人間として尊重し、その人のバックグラウンドを理解し、今何をしたいと思っているかをわかろうとする心が大切であるということ学んだ。
- ・看護師の同行を通し、ケアの際も指先まで神経が行き届き、丁寧さと温かさが感じられ、これこそが質の高いケアであると実感した。今後の自己の課題としていきたい。
- ・チームケアの充実を図るためには、カンファレンスを定期的に行い、多職種での情報共有や意見を述べ合うことで、さらに患者さんへのケアの質が高まることが理解できた。
- ・家族ケアについては、喪失を体験されるご家族にとって、最期の時間をどう過ごすかということとはとても大切となり、治療・ケアも患者さんのみならずご家族も納得した上でなされることの重要性を改めて実感した。
- ・研修が終了しても患者さんやご家族を尊重したケアを理想のままにせず、自分自身の課題として実践していきたい。
- ・患者さんの価値観や意思決定を大切にし、支えていくことが、最期までその人らしく生きるこ

とへの援助につながるのではないかと感じた。今後は、医療者側のアプローチだけでなく、患者さんの意思決定に重点をおいたケアに努めていきたい。

- ・ 聖ヨハネホスピスの研修を通し、核となるものがホスピスケアでも一般病棟でも、患者さんを思うマインドは一緒だと確信できた。また、ホスピスケアにおいてフィジカルアセスメント能力が重要ということも認識した。自施設に戻っても、患者さんを全人的に捉えられるよう、関わっていきたい。
- ・ 自分自身の生きる意味、死生観を考えさせられる場面に何度か遭遇し、今後、少しでも終末期患者さんが生きている喜びを感じられるようなお手伝いができるように取り組んでいきたい
- ・ 患者さんの“生きることを支え、QOLの改善・向上を目指す”というホスピス緩和ケアに求められる看護は、全ての領域や分野での看護の基盤になる“マインド”だということが理解できた。全ての人に誠実であること、学ばせていただく姿勢で患者さんの傍にいて、自分自身が人として成長を続けていこうとすることを忘れずにいたい。
- ・ 自分の看護観や人生観、死生観を深めることができ、自分にあるコミュニケーションバリアや考え方の癖、価値観について見直す機会となり、余裕やゆとりを持つことの大切さを学んだ。
- ・ 私の考える『ホスピスケア』とは、ホスピスという環境だけでなく、どこでもできるケアということ。そして、目の前にいる患者さんの話をただ聞くのではなく、注意を払い、その人の気持ちを理解しようとする姿勢で聞くこと、私（医療者）が聞きたいことだけではなく、相手の話したいことや伝えたいことに耳を傾けること、そして謙虚さや真剣さ、温かみのある態度で患者さんの気持ちにも配慮しながらケアすることの大切さを理解することが出来た。

以上のように、研修参加者にとって、講義で学んだ内容を臨床の現場で確認・統合でき、更に現場だからこそ実感できるホスピス緩和ケアにおけるチームのあり方やそのケアの進め方、コミュニケーションのあり方などが体験できていることがわかる。また、看護師としての専門性を高めると同時に人間性の向上にも役立っていることがうかがえ、本研修は十分な意義が認められる。

看護師同行による見学研修に対しては、自己の看護を振り返ることや、ホスピス緩和ケアをより理解することができ、見学研修だからこそ多くの患者さんと接し、一つひとつの対応が学べたとの評価が得られている。ただし、実際に受け持つことがない点を考慮し、継続した流れの中で患者さんを見ることのできるよう、同行する看護師を通してその日に担当している患者さんについては可能な限りケアのプロセスや状況の変化が分かるよう配慮しながら対応した。

今年度の研修生の背景としては、前年度同様、殆どが一般病棟での勤務であり、各々が一般病棟におけるホスピス緩和ケアの実践に対する課題を持って研修に臨まれていた。その上で研修生への対応については、研修生のバックグラウンド、自施設に戻った以降に求められている個々の役割などに合わせ、研修における目標が達成できるよう配慮し、実践可能な課題やケアの方法、工夫できる点にまで気づけるように心がけた。

本研修は今年度をもって終了となるが、がんで亡くなる患者さんの約9割は一般病棟であることを前提に、今後も一般病棟および緩和ケアチームのみならず在宅におけるホスピス緩和ケアの質の向上を目指した研修会の開催は必要と考える。そのためには、短期間の研修であっても、本研修のように臨地実習をプログラム化した中でのスタッフの育成が重要と考え、ホスピス緩和ケアの本質をしっかりと学べる研修の継続や検討を期待したい。